



Title	在日台湾人母の子育てのナラティブ分析：台湾留学への戦略的介入
Author(s)	中村, 香苗
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20, p. 37-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102044
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究論文》

在日台湾人母の子育てのナラティブ分析

—台湾留学への戦略的介入—

中村 香苗（淡江大学）

128094@o365.tku.edu.tw

Narrative Analysis of Taiwanese Mothers' Parenting in Japan:

Strategic Intervention in Children's Study Abroad in Taiwan

Kanae Nakamura

キーワード：台湾人母、日台青年、継承語教育、台湾留学、ナラティブ分析

1. 研究背景

近年、正規留学生として台湾の大学に進学する日本出身の学生が増加傾向にある¹⁾。正確な人数は把握できないが、その中には日本人と台湾人の国際結婚家庭の子ども（以下、「日台青年」または「日台学生」）も含まれている²⁾。筆者は、日本育ちの日台青年が、幼少期からの日本と台湾の間の移動に伴い、どのような経験をし、どんなアイデンティティを形成してきたのかに興味を持ち、2019年にインタビュー調査を開始した。最初の調査対象者となった5人の日台青年は、当時台湾の大学の日本語学科に在籍する学生であった。調査の結果、そのうち4人が家庭で中国語を継承しておらず、台湾のルーツもあまり強く感じずに成長したことが判明した（中村, 2022）。

この結果は、概して日本語の継承に肯定的な台湾社会で、日本にルーツを持つ子どもを育てている筆者自身や周りの日台家庭の親子の経験とは異なっており、正直筆者には驚きであった。そこには異なる時代における日本と台湾の関係性や、それぞれのホスト社会での親の母語の位置づけなどが要因として関わっている可能性が考えられる（中島, 2016, p.12-14）。そこで筆者は、上記の日台青年の親たちがどんな思いで日本で子育てをしたのか、なぜ中国語を継承させなかつたのかを追究するために、青年の台湾人母³⁾へもインタビューを実施することにした。

本研究の目的は、そのうちの2名の母親に焦点を当てて、彼女たちの子育て戦略を明らかにすることである。2人に共通するのは、子どもの幼少期に台湾の言葉や文化を学ばせたいという思いがあつたにもかかわらず家庭で中国語の教育をしなかった点と、それでも子どもを台湾の大学に留学させるという希望を実現させた点だ。ナラティブ分析の手法で、まず台湾人母が子どもの幼少期や進路選択段階での自身の考え方や行動をどのように語るのかを分析し、子どもの成長とともに変化した教育方針や実践を描き出す。次に、2人の子どもがインタビューの中で自身の台湾留学までの経緯をどう語っているのかも参考することで、当時の母親の言動が子どもの進路選択にどのように作用したのかを検証する。以上の多角的な分析を通して、2名の台湾人母の子どもの留学へ向けた「戦略的介入」を明

らかにする。

2. 先行研究

日本で子育てをしている台湾人母についての研究には、黄（2007）と蔡（2019）がある。黄（2007）は、1970年代と80年代に来日した台湾人母5名へのインタビューをもとに、台湾人母たちの日本社会での生存戦略を探った。その結果、子どもの文化習得や教育方式については概して日本への適応志向が見られたが、家庭での躊躇は自分の経験を踏まえて台湾式の教育方法を取り、日本式の家庭教育への抵抗が見受けられた。また、どの家庭でも何らかの形で中国語を教育する機会を子どもに与えているが、民族意識の継承という考えは強くないことも判明した。黄は、従来の在日中国人の生存戦略の先行研究と比較し、「在日台湾人母たちは「民族性の継承」というよりも日本社会への適応の度合いと民族的アイデンティティの保持の度合いを天秤にかけ、民族性を押し付けないオープンな教育戦略を取っている」（p.153）と結論づけている。

一方、仙台で子どもを育てている台湾人母4名にインタビューした蔡（2019）は、各家庭で状況に合わせてバイリンガル教育を模索していることを明らかにした。具体的には、家庭内で相手の優勢言語に合わせて日中語併用でコミュニケーションを図ったり、学校の長期休みに台湾に戻って子どもを現地の学校に通わせたり、家の中で楽しく遊びながら中国語を学べる環境を作ったりしている。しかし、4名中1名の家庭では、幼少期から家庭内で子どもと日本語で話していたために、子どもが中国語に抵抗を示す様子が報告されている。また蔡の研究では、生き方や文化、価値観の違いによる疎外感、中国語教育の資源と支援の少なさ、女性の社会進出の難しさなど、日本の地方都市におけるバイリンガル子育ての課題も指摘されている。

居住地域の社会的状況も考慮に入れた研究として、日本の農村部に嫁いだ中国都市部出身の母たちの教育戦略を探究した賽漢（2011、2014）も注目に値する。賽漢（2011）では、小学生以下の子どもを育てている3名の母親にインタビューした。具体的な戦略はそれぞれ異なるが、3人に共通するのは子どもを「自立できる・移動できる」人に育てて、自身も子どもの将来の移動形態に見合った住み方を選択したいと考えていることである。賽漢は、「移住の過程において自らが受け身的であったと自ら認識している母親は、子どもを通して人生を選び直したい」（p.170）と考える傾向があると論じている。

さらに、賽漢（2014）では中学生以上の子どもを持つ母親も対象に含め、小学生以下の子どもの母親との比較をもとに、子どもの年齢の違いにより農村地域の中国人母の教育戦略にどのような相違が見られるかを詳らかにしている。その結果、中学生以上の子どもは日本社会への同化が進んでおり、母親の教育戦略も以下のように変化していた。自立戦略においては、自立の決定主体が母親から子ども自身へと変化し、母親はそれを尊重する姿勢になっていた。移動戦略においては、海外への移動ではなく、日本社会の中での階層移動を目指すようになっていた。

真嶋・Thu Thu（2017）では、日本人と国際結婚しミャンマー語教育に関して真逆の方針を持つ2人のミャンマー人母を調査し、親の継承語や文化に対する態度により、子どももまったく異なるアイデンティティを形成していることが浮き彫りにされた。しかし3年後の追跡調査では、ミャンマー語をまったく教えていなかった母親の子どもが自らミャンマーの文字や文化に興味を持ち始めたのを契

機に、母親も積極的にミャンマー語を教える方針へと変化していた。

上記の研究からは、日本在住の外国人母が、それぞれの置かれた地域や家庭、子どもの成長の状況に合わせて、主体的に子どもの生存戦略や教育方針を考えていることが窺える。しかし、上記の研究は母親だけに話を聞いているため、それらの戦略や方針を子どもがどう捉えていたのかは見えてこない。

子どもの視点からの研究として、服部（2020）では、日本育ちで台湾の大学に正規留学した3人の日台学生の、台湾留学に至る経緯をTEM（複線経路・等至性モデル）を用いて検証している。その結果、台湾留学を促進する要因として、1) 子どもの主体性を尊重した家庭環境、2) 子どもの頃の定期的な台湾帰省と親戚付き合い、3) 家族や親戚によるサポート、4) 本人の自覚、5) 母親の子どもの教育に対する主体的な関わり、があることを明らかにした。母親の関わりに関しては、提示されているライフストーリー資料の中で、母親から台湾行きを勧められたなどのできごとが記述されている。しかし、母親側がどんな思いでそのような行動を取ったのかは、子どもの語りだけでは把握できない。

そこで本研究では、台湾人母の語りと子どもの語りを比較することで、台湾留学へ向けた母親の教育戦略を双方の視点から検証する。

3. 研究方法

本研究では、インタビューによって得た台湾人母と子の語りを、質的調査法の一つであるナラティブ分析により検証する。桜井（2002, p.39）は、異なる調査者がまったく同じインタビューをすることが不可能なライフストーリー・インタビューでは、量的調査にとっての「信頼性」に代わる基準は手続きの「透明性」であり、調査過程を読み手に対して明確にする重要性を主張している。この主張に則り、以下にインタビュー実施方法、調査協力者および分析手順について詳説する。

3.1 インタビュー実施方法

本研究対象の台湾人母は、OさんとTさんである⁴⁾。特にこの2人を対象にした理由は、台湾留学の経緯について母親の語りと子どもの語りに顕著な相違が見られ、そこに教育戦略の鍵があると思われたからである。

2人へのインタビューは、2021年にオンラインで行われた。OさんはLINEの通話機能で約1時間20分、TさんはZoomのビデオ通話で約45分、半構造化インタビューの形式で話を聞いた。内容は日本へ行った経緯から、来日初期の生活の様子、結婚や子育てについて、台湾と日本に対する意識など、結婚移民女性としての経験に幅広く触れた（質問項目の詳細は表1を参照のこと）。Oさんとの会話は録音を、Tさんの会話は画面録画をし、すべて文字化した。

子どものインタビューは、第1節でも述べた通り、母親へ聞き取り調査をすることは想定されていない状況下で2019年に実施した。本研究で使用するのは、Oさんの長女、レイ（仮名）とTさんの次男、コウジ（仮名）との会話である⁵⁾。インタビューは筆者の研究室で行われ、録音と録画をした。質問内容は、幼少期の台湾との関わりや中国語学習経験、家庭や学校での経験、台湾留学に至る経緯、留学後の経験などに及んだ（日台青年のインタビューの詳細は中村（2022）を参照されたい）。

2人の会話もすべて文字化した。

表1 母親への質問項目

来日の経緯	- 何歳の時、どのような理由で日本へ来ましたか。来日後の進路は? - 当時どんな生活をしていましたか。その頃の日本の印象は?
結婚について	- 何年に結婚しましたか。結婚までの経緯は? - 当初からずっと日本に住むつもりでしたか。
第一子出生時	- 言葉や文化についてどんなふうに育てたい・育ってほしいという考えがありましたか。 そのために何か特別なことをしましたか。 - 途中で子育ての方針が変わったことがありますか。それはなぜですか。 - 子どもの進路に関してどのような考え方や計画がありましたか。 - 第二子以降の子育ての方針も同じですか。
日本での子育て全般	- 日本と台湾で子育ての違いを感じたことはありますか。どんな点ですか。 - 子育てで悩んだ時、誰に相談しましたか。 - 当時、台湾人・外国人親のネットワークや行政のサポートなどがありましたか。 - 今、子育てを振り返ってどう感じていますか。後悔していることがありますか。
日台関係	- 来日当時と現在で、自身の日本と台湾に対する思いは変わりましたか。 - 来日当時と現在で、日本人の台湾に対する意識が変わったと感じることはありますか。

3.2 台湾人母の概要

2名の台湾人母のプロフィールは以下の通りである（基本情報は表2を参照のこと）。

Oさんは大学時代に日本からの交換留学生と仲良くなり、日本のこと色々教えてもらって興味を持つようになった。卒業したら日本へ留学しようと決意し、親を説得して1988年に東京の日本語学校に留学した。アルバイトをしながら勉強し、日本語能力試験1級を取って、某国立大学の理工系の研究生になった。1年後無事に大学院生となり、2年後に大学院を卒業した。日本で就職活動をしたが、当時理工系の女性が正社員の職を得るのはとても難しく、台湾に帰ればいい就職ができるため、帰ろうか迷った。しかし当時付き合っていた日本人の彼から結婚を提案され、専門職は諦めて貿易会社の事務の仕事に就き、結婚した。数年後の1997年にレイを妊娠して以降は正社員を辞め、控除対象扶養親族の所得金額内で仕事をしている。

一方、Tさんの場合は、親の仕事の関係でTさん以外の家族が全員先に日本の関西圏に移住していた。Tさんは台湾で高校を卒業してから、1974年に来日した。1年半くらい語学学校で日本語を勉強し、それから某大学に入学した。当時家ではほとんど台湾語で話しており、大学にも台湾からの留学生が多くいて、彼・彼女らと台湾語を話していた。そのため、長期休みに台湾に戻っても共通言語（中国語）はほとんど忘れてしまっていた。1988年に日本人男性と結婚し、1995年に長男が、1997年にコウジが生まれた。子どもの幼少期から現在までずっと仕事を続けている。

表2 調査協力者（台湾人母）の基本情報

	来日時期	来日理由	来日後の進路	家族 (子の出生年)	居住地
Oさん	1988年	留学	語学学校から 大学院進学 卒業後に結婚	夫 長女レイ（1997）	東京
Tさん	1974年	親の仕事のため 家族移住	語学学校から 大学進学 卒業後就職	夫 長男（1995） 次男コウジ（1997）	大阪

OさんとTさんは来日時期と理由が異なっているものの、共通点も多い。2人とも高学歴で都市部在住である。結婚当初から高い日本語能力を有しており、日本での生活にもある程度適応していた。子育ての時期もほぼ重なっている。夫は中国語ができないため、家庭内言語は日本語で、2人とも仕事をしつつ家庭内では子育ての中心を担っていた。

3.3 分析方法

本研究では、ナラティブ分析の手法を採用する。まず母親へのインタビューや会話の中から、子育てに関する語りに焦点を当てて分析する。特に、子どもの幼少期の子育て実践と子どもを台湾に留学させるまでの経緯をどのように語るのか、時間の流れに沿って検証し、OさんとTさんそれぞれが子どもの進路についてどのような思いを持ち、具体的にどんな行動を取ったのかを明らかにする。

次に、子どものインタビューや会話の中から、台湾留学を目指した経緯に関する部分を、母親の語りと対比させて検討する。両者の語りの比較を通して、当時の親の考え方や行動を子どもがどのように理解していたのかを解明する。

4. 分析

4.1 Oさん母子のケース

4.1.1 繙承語教育をしなかった理由

Oさんはレイが生まれた当初は、中国語と日本語を両方習得させようと家の中で中国語を話したことわざがあった。しかし、当時は国際結婚の子どものいじめ問題があったため、中国語はやめようと夫に言わされた。その時のことをOさんは以下のように語っている。

発話データ 1⁶⁾

最初はやっぱりせっかく国際結婚だし、中国語とか日本語両方マスターさせようと思ったんですね。一生懸命、うちの中、中国語喋ったりする。その時うちの主人が反対したんですよ。ここは日本だから、要するに中国語教えるのは、日本だから日本語が先でしょって言われて。あと、その時もやっぱり国際結婚の子どもたちのいじめの問題もあって、だからこの子がなんか喋ってる言葉がわからない周りの人がとか、なんかねそういうのもいじめられる、まあそういう友

達もいたんですよ、実際の話。でたぶんうちの主人もそういうのは聞いて、やっぱりここは日本だからレイは日本人として育てたいんだから中国語はやめましょって言われたんですよ。であれからもう全部レイと全部日本語にしたんですよ。

27:49-29:18

発話データ 2

でも実際やっぱりいじめられるのはママのせいだったらすごい嫌ですね。[そうですね、辛いですよね、お母さんとして] そうそうそう。だから私も子ども育ちながら、この子を日本人として育ちながら、自分も日本人らしく、あのこうちょっとね、ママが台湾人だからどうのこうのつて言われないように、色々気をつけたけど。

30:00-30:32

発話データ 3

だから私もなるべくそういう台湾の友達だけを作らないで日本の友達もけっこういっぱい作ったんですよ、できるだけ。で今バイトしてるところは外国人は私1人だけですよ。((中略)) で子どもは日本人として育てたい。でだから自分も日本人らしく生活したいってそう言う覚悟もします。

36:19-37:21

レイを「日本人として育てたい」というのは本来は夫の要望だったが、Oさんの語りからは、レイが自分のせいでいじめられないようにOさん自身も「日本人らしく」なろうという強い「覚悟」を持つて、中国語を教えない決断をしたことが窺える。

4.1.2 台湾留学へ向けた進路選択

レイが中学生の時に、Oさんは台湾関連のイベントに参加して台湾華僑子女の留学制度があることを知る（以下の発話データ4から7では、Oさんの留学に対する思いには下線を、留学へ向けて実際に取った行動には二重下線を付す）。

発話データ 4

ちょうど中学3年生の時 たまたまなんかイベント、台湾のイベントで参加してて、それでなんか台湾人の親、片方どっちかね、その子どもが台湾の大学留学のそういうシステムがあるって知ってて、それだったらレイもそういうシステムを利用して台湾の大学を行かせようかなって、その時ちょっと考えがあって、それでレイに言ったんですよ。大学、台湾留学行く？とか聞いたたら、意外とレイも海外一人暮らしまんかすごい憧れて、あ行きたい行きたいって言い出して。あそれだったらもっと詳しくこっちの台湾の大連絡館に連絡して、そういう資料があればちょっと送ってきてほしいって。それでいっぱい送ってきたんで。その手続きのやり方とかいろいろな説明書も1冊全部送ってきて、それで読んだら あ、これすごいいいチャンス。すごいせっかくママが台湾人だから、まあ高校まで日本人として育てて今度は違う文化をちょっと勉強させ

ようと思って。

39:24-41:43

レイの台湾留学に対する意志を確認したOさんは、日本にある台湾の政府機関から詳しい情報を収集し、レイを留学に行かせようという気持ちを強くする。その後、Oさんは中学の三者面談や高校の説明会で、以下のような行動を起こす。

発話データ 5

それでちょうどたまたまその時が中学3年生の時だったんですよ。でちょうどその三者面談の時、進学がどうしますかとか、大学行くか専門学校行くかとか先生も色々案が出てきて、でちょっと先生には相談したんですよ。実は大学は台湾の大学留学させたいので、できれば中国語マスターできる高校ちょっと紹介してほしいです。そしたらまたまうちの近くに私立高校の国際科があって、先生が教えてもらったんですよ。そこの高校うちも近いし、そこの私立高校だったら国際科があって第二（外）国語が中国語がマスターできるんですよって。

41:43-42:46

発話データ 6

で、教えてもらって、その参観日の時レイ連れて学校の説明会行きました。で何回も行って、レイもとにかく台湾留学がもう憧れて行きたいと一心で、レイも国際科に興味があって、色々説明会も何回も行って、その担当の先生も面談して、ぜひ入りたい。でそのやっぱり日本の私立高校で学生取る時はこの学生が将来自分の学校アピールできるかどうかの、その条件もやっぱり見てるんですね。で面談の時、私が台湾留学のシステムの書類を持ってったんですよ。でレイが大学日本の大学行くんではなくて台湾の大学留学させたい。で台湾の政府はこういうシステムがあるから、もう絶対この学校にはアピールできる。[アピールになる。卒業生が台湾の留学] そうそう、卒業生が台湾の留学、そうです。せっかく国際科だから、外国留学成功した卒業生いればすごいアピールできる、それも私がすごいアピールしたんですよ。[お母さん、うまいhh] そしたら入試なしで取ってくれたんですよ。

42:46-44:51

Oさんは、中学の進路指導で担任教師から中国語が学べる高校を紹介してもらうと、レイを連れて何度も見学に行く。さらに志望校の担当教師との面談では、レイの台湾留学が高校のメリットになることを積極的にアピールし、レイの国際科入学を実現させる。Oさんの介入は、レイの高校入学後も以下のように続く。

発話データ 7

それで国際科無事に推薦入学で入りました。でその高校の3年の間の夏休み、実際国際科もいろんな行事があるんですよ。でその時私、国際科の主任に、もう入学の時から言ってある。台湾留学させたいので 夏休み中は留学、台湾の短期留学、中国語勉強させたいので学校の行事

は参加できませんって言い出したんですよ。でその学校の主任が、それは留学するための勉強だからそれはオーケー欠席は、[取りませんと。欠席扱いしませんと] そうそうそう、それは大丈夫です。ちゃんとその留学の書類をね、学校に提出すれば行事参加しなくてもオーケーですってオーケーをもらって、高1の夏休みから台湾の短期留学、中国語の短期留学をさせたんです。

46:03-47:35

レイが高校に入学するとすぐに、Oさんは国際科の主任と交渉し、夏休みの行事などを欠席してレイを台湾に短期留学に行かせる許可を取る。以上のように、Oさんは中学の進路指導から高校選択、高校入学後の過ごし方まで、レイの台湾留学へ向けてさまざまな行動を起こした。では、Oさんがこれほど積極的にレイの進路に介入した動機は何だったのだろうか。

まず、「高校まで日本人として育てて今度は違う文化を勉強させよう」(発話データ4)という語りからは、レイに日本以外の文化を理解できる人になってほしいというOさんの思いが垣間見える。そして、「いいチャンス」や「せっかくママが台湾人だから」(発話データ4)と言うように、自分のルーツを子どもに異文化を勉強させるための「資源」として捉えている。

しかし、それだけではないようだ。Oさんの語りの中では、「レイも海外一人暮らし憧れて」、「行きたい行きたいって言い出して」、「レイも台湾留学が憧れて行きたいと一心で」、「レイも国際科に興味があって」のように、レイが留学に行きたがったということがくり返し述べられている。つまり、レイの希望を叶えたいという思いもOさんの原動力となったのである。

それでは、当時のことをレイはどういうふうに語っているのだろうか。次項で検討する。

4.1.3 レイの語り

発話データ8は、レイが台湾留学を初めて耳にした時のことについての語りである(本項で提示するレイの語りでは、留学に対するレイ自身の気持ちに下線を、外部(親など)からの影響には二重下線を付す)。

発話データ8

[お父さんお母さんは中国語をやってほしいっていう] のはちっちゃい頃本当なかったんですよ。でも中学に入ってから母親からなぜか台湾の大学に行ったら?って言われたんです。[あ、本当? なんでだろ、それは] たぶんですけど、日本の大学って学費高いじゃないですか。[hhhh] 台湾の大学に来れば留学したっていう、言い方は本当悪いんですけど、ステータスとかもあるし、今英語本当できないんで、中国語もできるようになるし、そういうのも考えて言ってくれたんだと思います。

10:14-10:55

前項の発話データ4で、Oさんはレイに「台湾留学行く?」と聞いたと述べていた。それに対し発話データ8では、レイは母親から「台湾の大学に行ったら?」と言われている。つまり、Oさんはレイに留学の意向を聞いたと記憶しているが、レイはOさんから留学に行くよう勧められたと捉えているのである。さらにレイはその理由も、親のため(学費が安い)と子どものため(ステータス、

英語ができない、中国語ができるようになる)の両面あると理解している。

次に、レイ自身が留学に行こうと思うようになった経緯を探ったところ、以下のような語りが得られた。

発話データ 9

[自分がその気になったのはいつ頃ですか?] その気になったっていうよりも、流れで、ああ、じゃあもう台湾に行くか、みたいな。もともと中国語には興味あったんですよ。 [いつくらいから] 高校の時、国際科で中国語の授業があって、それで1学期の時はすごい成績悪かったんですよ。テストも60点とかで。でも親から夏休みにG大学って場所で短期留学行ったら?って。そん時にけつこう留学とか憧れて hh 憧れてたから行ってみようって思って行って、でそしたらもともと低かったんで中国語が、3週間で相当変わるんですよ。 [そうだね、わかるわかる] で日本に帰ってテスト受けたら90点に跳ね上がって、そっからやっぱ結果が見えるとやる気が出るんですよ。 それで私中国語向いてるのかもしれないhhh錯覚しちゃって、あ、もう英語は私ダメだって思って、あ台湾の大学も悪くないなって感じですね。

11:24-13:08

発話データ 10

[国際科にそもそも高校から行ったっていうのはなんなの?] あの、家から近かったっていうのもあるんですけど、やっぱ母親も台湾の大学に行ってほしいっていう希望はあったんですよ。 でちょうど中国語の授業もあるし、まことに。[なるほどね] あとは指定校推薦も? [中学からの] 単願推薦です。単願推薦できるので、それでもう受かったから、[行くぞ。行こう] 行かなきやいけないhhh

13:09-13:43

上記の発話データでは、レイ自身も中国語や留学に興味があったと述べている。しかし、前項のOさんによれば、レイが台湾留学に興味を持ったのはOさんがレイに意向を聞いた中学時代だった。一方、レイの語りを見ると、最初は「親の希望」で台湾の大学進学を考え始め、本格的に台湾留学を目指そうと思ったのは、高校進学後に短期留学を経て、中国語の成績が上がってからである。レイはその一連のできごとについて、「じゃあ、もう台湾に行くか」、「私中国語向いてるのかもしれないhhh錯覚しちゃって」、「(英語はダメだから) 台湾の大学も悪くないな」、「(高校の国際科に) 行かなきやいけない」と、一貫して消極的・受動的な表現で語っており、その上で台湾留学は「流れ」であったと述べている。つまりレイは、台湾留学は親の作った流れに乗った結果、いわゆる「成り行き」であったと捉えていると言えよう。

4.2 T さん母子のケース

4.2.1 家庭で中国語教育をしなかった理由

Tさんは、長男を短期間だけ中華学校の幼稚園に入れたが、仕事で送迎ができなかつたため通わせ

るのを諦めた。それ以降は、息子2人とも幼稚園から高校まで地元の学校に通わせた。Tさんは当初は中国語で育てたいという気持ちもあったが、それができなかつた理由を以下のように語つた。

発話データ 11

[じゃ普段家で中国語で話しかけてたんですか] いいえ、ほとんど日本語で。だって私中国語話しても返ってきたの日本語。子どもたちな。[ほんとはだから中国語で育てたかった?ですか] そうです。[やっぱでも難しかった、日本では難しい?] そうですね。しかもうちには家族4人で住んでて、だからほとんどうちの人も日本の方で、あまり向こうの言葉できないから、どうしてもその機会なくて。ほいで一応私の両親あるいは家族兄弟たちいても、やはりどうしても弟たちの姪っ子とか甥っ子とかみんなほとんどやはり日本で育ってるから、日本の中学高校で育つてから、だからやはりどうしても日本語出でますから。どうしても家の中でも日本語出でます。みんな集まつてもやはり日本語出でます。

11:19-12:39

発話データ 12

[全然教えたりもしなかつたですか] それも教えてない。なんでというと、私、自分自身が、あかんから。hhh 今ほんまに今でもな、はつきり言ってどう書くかは忘れた。

14:46-15:07

家族も親戚も自分自身もすでに日本に長く居住し親戚の子どもたちも日本語で育っていたことに加えて、Tさん自身が中国語の書き方などを忘れてしまっており、子どもに中国語を教えることが難しい環境だったことが窺える。

当時の教育方針については、Tさんも夫も放任主義で、教育面に関してうるさく要求しなかつたそうだ。しかし、まったく考えがなかつたわけではなく、Tさんには中国語の継承よりも重視していたことがあつた。

発話データ 13

ただ唯一私の、やはりどうしても入れたいのはうはな、日本の団体グループ入らないと、やはり子どもに対して、それと私自身にも。日本の団体グループは入れなくて、どうしてもそれ入りたいとしたら、ボイスカウトに行かしたね。

15:51-16:13

上記の語りからは、Tさんが日本で子育てをする上では親子ともに団体活動に入ることが大切だと考えていたことが見てとれる。

4.2.2 中国語継承の思いの芽生え

Tさんは家庭では中国語教育をせず、子どもたちの習い事やボイスカウトの活動を優先させた。その代わり、子どもが小学生の間は、長期休みになると自分の親や兄弟に子ども2人を台湾に連れて

帰ってもらい、「安親班」という日本の学童保育のようなクラスに通わせた。当時は2人とも嫌がることなく通い、中国語も理解できたという。しかし、長男はあまり台湾に興味を持たず、自分の意志が強いタイプだったので、Tさんは長男には台湾への進路を勧めなかった。一方、次男のコウジに対しては、やがて以下のような思いを抱くようになる（発話データ14と15では、Tさんの留学に対する思いに下線を、留学へ向けて実際に取った行動に二重下線を付す）。

発話データ14

その時（長男出生時）まだ（どんなふうに育てようという考えは）なくて、逆にコウジが小学校の時に、やはり私台湾生まれですから、どうしてもある台湾のことを、あるいは中国語を忘れたらあかんと思って、その時もう、まあ、普通で卒業さえできたら、日本の高校卒業して台湾の大学行かそうとその時思ったんです。

9:08-9:38

上記の語りからは、自分のルーツを意識したTさんが、子どもが（あるいは自分が）台湾や中国語を忘れないように、コウジを台湾の大学へ行かせようと考えたことがわかる。

4.2.3 海外華僑青年研修団への参加

Tさんがコウジの台湾留学を意識したのはコウジが小学生の時だったが、実際にそれに向けて行動を起こしたのは、コウジが高校生になってからである。

発話データ15

コウジ君はもちろん、最初安親班行って、A大学入る前に、華僑觀摩團、華僑青年觀摩團として、台湾の一週に遊びの行って、その翌年中国語の勉強として台湾行かした。2回連続で、台湾に。それを興味あって、だから台湾の大学行きたいって言ってたから。〔へえ：：〕やはり子どもに対しては、まず遊びのことで行かして、その後で勉強する。そのほうが何？子どもはウケるでしょ？ hhh

17:25-18:18

「華僑青年觀摩團」というのは、中華民国僑務委員会⁷⁾が主催している海外の中華民国華僑および華人⁸⁾の子女のための台湾研修ツアーである。青年たちに台湾を深く認識してもらうことが目的で、台湾各地を巡り、さまざまな文化体験をする。Tさんはコウジが高校2年生になる前の春休みに、コウジをその研修ツアーに参加させた。そして、次の長期休みには2回連続で、中国語の勉強のために台湾に短期留学させた。

Tさんがこのようなステップを踏んだのは、「いきなり勉強行って行ってって言うたら絶対行かへんと思うから」だと、発話データ外の語りの中で述べている。そのため、Tさんは、まず「遊び」で台湾を体験させ「その後、勉強」として行かせたほうが子どもには「ウケる（受け入れられる）」と考えたのである。

4.2.4 コウジの語り

それでは、コウジ自身は自分の台湾留学までの経緯をどのように語っているのだろうか。まず、台湾研修ツアーについて見ていく（以降の発話データではコウジの留学に対する気持ちに下線を、外部からの影響に二重下線を付す）。

発話データ 16

[大学に入学する前のコウジさんと台湾との関わりっていうのはどんな感じ] いや、まったくないかかったんじゃないですか。ちょっと高校1、2年かな1年生から2年生の時、なんでしたか、あの台湾の政府がなんかあの:1周するみたいななんか旅行企画みたいな、なんか勉強みたいな、[スタディツア] 台湾スタディツアみたいな ((中略)) まそれで一旦来て。でまあA大学来たんすよ。寮に泊まつたんすよ。 [あ、そうなの?ああ: :じゃそれがちょっとAを] そうですね。[意識する] 意識する [きっかけ?] きっかけ。ちょ、ちょっと、ちょっとぴり。

1回目 2:12-3:09

発話データ 17

[現地の人との交流もあった?] あのサポーターみたいな感じでAの学生さんとかいたんです。((中略)) [それが一つのきっかけで進路考える時に] あ:役立ちました。 Aの学生だったんでなんかけっこうよかったです:と思って。優しくしてもらえたみたいな [その印象が強かったんだ] 印象が強かったです。

2回目 9:20-9:59

発話データ 16 は、台湾の大学に留学に来る前のコウジと台湾の関わりについて、筆者が質問した際のコウジの回答である。Tさんの語りで示した通り、コウジは子どもの頃、長期休暇に台湾に滞在したことがあり、それについて覚えてもらっているが、上記の語りからは、その経験を「自分と台湾との関わり」として捉えていないことが窺える。台湾研修ツアーに関しては、その目的をほとんど理解していないかったようだが、ツアーでA大学に来たことが少しだけA大学を留学先として意識したきっかけとなつたことがわかる。さらに2回目のインタビュー（発話データ 17）では、そのツアー中に現地学生と交流したことが進学先を決める際に役立つたと述べている。では、そもそもコウジが台湾の大学に留学しようと思った理由は何だったのだろうか。

発話データ 18

[それこそどうして台湾の大学に来ようと思ったの?] 台湾の大学、もともと高校のなんか、大学行こうなんか就職しようなんか [進路指導ね?] 進路を考えた時に、まあ自分に何があるかなって思った時に、ハーフで中国語まだダメだったんですよ。なんでもうちょい伸ばしたらいいかなって思つて。[それはじや自分のモチベー、自分がそう思った?] 自分がそう思ったんですね。[ああ周りから言われた] 言われたとかじやなくて。[じやなくて? あそなんだ。へえ:] あとやっぱり海外の学校とかちょっと興味あるじゃないですか。 どんな感じなのかなとか。まあそういう興味があつたっていうのもあります。

1回目 6:40-7:21

コウジは高校の進路指導で「自分に何があるか」と考えた時に、自分が「ハーフ」なのに「中国語ができない」ことを意識し、「中国語をもうちょい伸ばしたらいいかな」と考えたことが台湾留学を目指したきっかけだったと語っている。また、そもそも海外の学校に興味があったことも窺える。そして、そのように考えるようになったのは、親など周りからの影響ではなく、コウジ自身の意志だと語っている。

では、実際に台湾留学を決めた時の親の反応についてはどう見ていたのか。

発話データ 19

お母さんは、ま別にいいんじゃない?みたいな。[hhh ジや別にお父さんもお母さんもすごいサポートして、台湾の大学へ頑張れ: みたいな行け: みたいな] ま、そういうのはお母さん側は、んん、ちょっとあったんですけど。[ちょっとあった?] まあ選んだんやつたらええんちゃう? ぐらいの。[あそなんだ。でも割とさらりとしてるね] そうですね。[自分の国を息子が知ってくれて、勉強してくれて嬉しいみたいな] そこまでではないですね。

2回目 13:45-14:21

コウジによれば、母親はコウジの決断を支持してくれたようだが、「ま別にいいんじゃない?」という比較的低調な反応だったようである。コウジの語りからは、Tさんが別段コウジの決断を喜んでいる様子が感じられない。しかし、実は前項の発話データ 15 の後で、筆者が Tさんにコウジが台湾留学に行きたいと言い出した時の気持ちを聞いたところ、Tさんは「嬉しかった。やはり嬉しかった」としみじみと答えたのである。

以上のように、Oさん母子も Tさん母子も、台湾留学へ向けた母と子の語りの間には多くの齟齬が確認された。しかし、これこそが Oさん、Tさんそれぞれが取った戦略的介入の結果だと言えよう。詳細は次節で論じる。

5. 考察

前節の分析結果をもとに、Oさん、Tさんそれぞれが家庭で中国語を教えなかった要因と、その後の子どもの台湾留学へ向けた介入について整理する。

5.1 日本語での子育て要因

Oさんと Tさんが家庭内で日本語だけで子育てをした要因には、先行研究との共通点が見られる。一つは、母親自身の高い日本語力（ゴロウィナ・吉田, 2017; 服部, 2020）と夫の中国語能力の欠如である。また、Oさんがレイを「日本人」として育てる決意した背景には、賽漢（2014）やゴロウィナ・吉田（2017）でも指摘されているように、海外ルーツの子どもに非寛容な日本の社会状況が再確認できる。栗田・鈴木（2018）では、国際結婚家庭の親の母語保持が困難な要因を以下のように論じている。

外国に居住している母または保護者の母語が「いわゆる社会的価値」が低いと認知されており、母語の背景に強い宗教や政治、文化的な継承の動因が存在せず、滞在国で母国語のコミュニティにアクセスしておらずまた夫婦のうちのどちらかが滞在国の多数言語を母語としていて、母語継承の重要性の知識がない場合、最も子育てにおける母語保持が困難となることが想定される。(p.105)

自身も「日本人」のようになってなるべく外国人と付き合わないようにしながら子育てをしたOさんも、上述のケースであったと言えるだろう。Tさんも、日本社会の非寛容という捉え方はしていなかったものの、親子ともに団体活動に入ることを重視していた点から日本社会への適応への強い志向が見られた。

さらに、Tさんの場合は、周りに台湾人家族や親戚がいたにもかかわらず、若い頃からの日本居住により自身が出身地の共通言語(中国語)を忘れてしまったという要因も判明した⁹⁾。これについては、歴史的・言語的に複雑な台湾の社会背景が関係している。Tさんの語りから察するに、Tさんの「母語」(主要な家庭内言語)は台湾語である。しかしながら、Tさんは子どもたちに台湾語を教えようとは考えず、継承させる言語はあくまでも中国語だと考えていた。紙幅の関係で本稿ではこの点について深く論じないが、出身地の社会言語状況の複雑さが子どもへの継承語教育に影響を及ぼす可能性を指摘したい。

5.2 子どもの台湾留学へ向けた介入

OさんもTさんも、子どもの成長過程で「台湾の大学へ進学させる」という新たな教育目標が生まれた。その主な理由は、Oさんの場合は「日本人」として育てた子どもに今度は「異文化を勉強させたい」という思いであり、Tさんの場合は、「ルーツの継承」だった。黄(2007)によれば、在日台湾人母は概して民族意識の継承という考えは強くない。しかし、Tさんの場合は自分自身も中国語を忘れている部分があるため、言語やルーツの忘却への強い危機感が要因となったと考えられる。

前述のような思いから台湾留学を視野に入れた2人だったが、それに向けて取った戦略は真逆であった。Oさんは、自身の思いだけではなくレイの留学へ行きたいという希望を叶るために、中学や高校の教師と進路や進学後の過ごし方について積極的に交渉し、さまざまな行動を起こした。レイはこの時期の一連のできごとを、「じゃあ台湾留学に行くか」と思わせるような「流れ」であったと受け止めていたが、まさにこの「流れ」こそ、Oさんが戦略的に中学や高校を巻き込んで作った道と言えるだろう。

Oさんとは対照的に、親が留学を無理強いすれば抵抗されると思ったTさんは、暗示的な介入に徹した。具体的には、まず「遊び」としてコウジに台湾を体験させ、その後あえて積極的に留学を勧める姿勢を見せないことで、コウジが「自分で」台湾留学を目指すような道を作った。実際、コウジは親が留学に向けて介入していたとは思っておらず、すべて自分が決めたことだと捉えていた。

6. おわりに

本研究では、家庭で子どもに台湾の言葉や文化を継承しなかったものの子どもを台湾の大学に進学

させた2人の台湾人母に焦点を当てて、幼少期の子育て方針とその後の台湾留学へ向けた戦略的介入の方法を探った。先行研究でも明らかにされたように、外国人親の教育戦略は固定的なものではなく、子どもの成長とともに変容する可能性があるが、OさんとTさんの語りからもそれが再確認できた。

台湾留学を視野に入れて以降2人が取った行動は、明示的介入と暗示的介入という真逆の方法だった。しかしそのどちらも、子どもの性格や得手不得手を考慮した戦略的な介入で、結果的に子どもに「台湾に留学しよう」と思わせることに成功していた。さらに本研究では、進路選択時の様子を子どもの語りからも検証した。その結果、「親の心子知らず」という諺の通り、当時の母親の思いや行動は子どもにはまったく異なる捉え方をされていたが、それも含めて親の戦略的介入の成果であったと言えよう。

本研究では、台湾留学の希望を叶えることができた親子の事例を検証したが、親の介入が必ずしも理想通りの結果になるとは限らない。また、そもそも親の母国への留学が教育戦略として位置づけられていない家庭も多くあるだろう。今後もさらに多くの外国にルーツを持つ親子のナラティブを集め、日本における外国人親の教育戦略や子育て実践、それに影響を与える社会的要因などを探究していきたい。

注

- 1) 台湾教育部統計處「大專校院境外學生概況」(<https://stats.moe.gov.tw/statedu/chart.aspx?pvalue=36>) 参照(2023年9月24日閲覧)。
- 2) ほとんどの日台学生は、「僑生」(親のどちらかが中華民国籍を有したことがある学生)か「境外生」(一般的な留学生)のどちらかの身分で台湾の大学に在籍する。後者の場合は、他の日本籍の留学生と区別できないため、教育部の統計資料からは日台学生の正確な人数を把握することはできない。
- 3) これまで研究に協力してくれた親子はすべて母親が台湾出身というケースである。インタビューした台湾出身の母親たちの中には、すでに日本に帰化した人も含まれているが、便宜上、本文中では「台湾人」母と呼ぶ。
- 4) 今回は最初にインタビューをした子どもたちが全員、教育に関しては台湾人母が主導権を握っていたと語ったため、母親に話を聞いた。しかし家庭内の教育戦略の全容を明らかにするには、やはり父親の関与についても調査する必要があろう。父親を含めた調査は今後の課題したい。
- 5) コウジのインタビューは、フォローアップのために2回行われた。2回目は1回目のインタビューの1週間後に実施された。
- 6) 発話資料は、調査協力者の発話から言い淀みなどをある程度除いた語りの抜粋である。文法などの誤用はそのまま引用している。()内は補足説明、hは笑い声、:は音の延長、イタリック体は中国語の発話、[]内は調査者の発話を表している。発話データの下に書かれた数字は発話時間(例えば、発話データ1は、インタビュー開始後27分49秒から29分18秒の間に起こった語り)を示している。
- 7) 中華民国僑務委員会とは、中華民国にルーツを持つ海外移民のための業務を行う機関である。毎年、各国の16~25歳までの華僑(華人)青年を対象に、台湾への認識を深めるための研修ツアーを実施している。
- 8) 学術的定義では、「華僑」は出身国(この場合は中華民国)の国籍を持っている人、「華人」は居住国の国籍を取得した人を指す。
- 9) Tさんとのインタビューから察するに、中国語を完全に話せなくなってしまったというわけではない。おそらく現代の台湾の子どもが習う「注音」と呼ばれる発音記号などを忘れてしまったために、子どもたちが小さい時にTさんが自ら教えることができなかつたのだと思われる。

謝辞

本論文修正にあたり、2名の査読者には貴重なご意見をいただきました。ここに感謝申し上げます。なお文責はすべて著者に帰します。

付記

本研究は、台湾科技部專題研究計画『在日台日家庭的繼承語教育與子女的自我認同』(110-2410-H-032-024-) の補助を受けています。

引用文献

- 栗田七重・鈴木庸子 (2018)「外国人家庭・国際結婚家庭の子育てにおける母語の保持—国内外の事例を中心に—」『教育研究』60, 103-109.
- 黄嘉琪 (2007)「在日台灣人の日本社会への適応戦略—ニューカマーの母親を事例に—」『社会学雑誌』24, 141-156.
- ゴロ ウィナ・クセニヤ・吉田千春 (2017)「就学前児童への外国人親の母語の継承における社会心理的要因—在日外国人母親によるナラティブを中心に—」『言語文化教育研究』15, 92-108.
- 賽漢卓娜 (2011)『国際移動時代の国際結婚—日本の農村に嫁いだ中国人女性—』勁草書房
- 賽漢卓娜 (2014)「国際結婚した中国出身母親の教育戦略とその変容—子どもの成長段階による比較—」『異文化間教育』39, 15-32.
- 蔡薰婕 (2019)「仙台在住の台湾人母親の言語教育に関する事例報告」『多元文化交流』11, 87-103.
- 桜井厚 (2002)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書房
- 服部美貴 (2020)「日本育ちの日台「ハーフ」の進路選択過程」『台大日本語文研究』39, 131-162.
- 中島和子 (2016)『完全改訂版バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること—』アルク
- 中村香苗 (2022)「日台「ハーフ」青年の成長経験とアイデンティティ—台湾の日本語学科の留学生の事例から—」『淡江日本論叢』46, 97-117
- 真嶋潤子・Thu Thu Nwe Aye (2017)「日本で子育てをする国際結婚家庭における親の教育姿勢とその影響—ミャンマー人母親二人の事例比較—」『日本語・日本文化研究』27, 39-49.

要 旨

本研究では、ナラティブ分析の手法で、幼少期に台湾の言葉や文化を教育しなかったものの子どもを台湾の大学に留学させるという希望を叶えた2人の台湾人母に焦点を当てて、2人の子育て戦略を探った。分析の結果、2人が日本語だけで子育てをした要因には、自身の高い日本語力と夫の中国語能力の欠如、海外ルーツの子どもに非寛容な日本社会、台湾社会の複雑な言語背景などがあった。しかし、子どもに「異文化を理解できる人」になってほしいという願いや「ルーツの継承」という思いから子どもの台湾留学を視野に入れて以降、2人は子どもの性格や得手不得手などを考慮したそれぞれのやり方で、進路選択に戦略的に介入したことが明らかになった。さらに、進路選択時の子どもの語りも検証した結果、当時の母親の思いや行動が子どもにはまったく異なる捉え方をされていたことも判明したが、それも含めて親の戦略的介入の成果であったと言える。

Abstract

Using the method of narrative analysis, this study explored the parenting strategies of two Taiwanese mothers who did not teach their mother tongue and culture to their children at an early age, and yet fulfilled their wish to send their children to a Taiwanese university. The analysis revealed that two mothers raised their children exclusively in Japanese due to their own high Japanese language competence, their husbands' lack of Chinese language skills, the intolerance of Japanese society toward children with overseas roots, and the complex linguistic background of Taiwanese society. However, at some point of child rearing, the two mothers began to consider having their children study in Taiwan because of a desire for their children to become "a person who can understand different cultures" and a desire to "pass on the Taiwanese root," and then, they strategically intervened in their children's career choices in their own ways. Moreover, close examination of the children's narratives regarding the time of their career choice revealed that the children perceived the mother's thoughts and actions in completely different ways, which can be seen as the result of the parents' strategic intervention.